細川氏被官の文芸活動

―安富宝密・宝城の場合―

稲田利徳

はじめに

平安時代にあって、貴族階級の占有の文芸といった感すらあった和歌は、武士が政権を掌握するようになった鎌倉時代頃から、漸次、武家階層の中にも浸透してくるようになる。

天皇や院の綸旨・院宣によって撰集される中世の勅撰集の世界においても、武家の勅撰歌人や入集歌数の増加してゆく実態が詳細に報告されてもいる[1]。

この傾向は室町時代になると一段と顕著になり、もはや室町期の和歌史は武家歌人を等閑視しては成り立たない状況を呈している。勅撰集にしても、「新千載集」は足利尊氏が執奏し、北朝の後光厳天皇の勅命によって成立するが、これ以降の三勅撰集もすべて武家執奏が慣例となるなど、武士が政治・経済だけでなく、和歌などを含めた文芸の担い手として浮上してくる。

こういった状況の背景には、武家階層の、公家の雅びな文化を吸収しようとする積極的な営為があった。その営為は、単に室町将軍の周辺に限定されたものではなく、守護大名とその被官層をも捲き込み、時代の大きな潮流となっていったのである。地方の守護大名が、自身の領国の文化向上を企図し、京洛の著名な公家文人などを招待し、その摂取に努めている実態は、従前にも、日本史学や国文学の研究者によって、かなり解明されてきている[2]。

京洛の文化を自身の領国に旺盛に摂取した守護大名としては、能登の畠山氏、越前の朝倉氏、若狭の武田氏、駿河の今川氏、周防の大内氏などが挙げられるが、とりわけ守護大名のなかで、最大規模の分国を最も長期にわたって保持し、管領家を踏襲した細川氏は、領国讃岐にとどまらず、京洛とも関わって、盛んな文芸活動を展開している。その実態に関しては、すでに米原正義氏に「細川氏の文芸」[3]の論考がある。けれども守護大名の文芸摂取の下支えを行な

ってきたのは、その被官クラスの武士であり、彼らの存在を無視することはできない。米原氏はその点も考慮し、「細川被官人の文芸―上原・四宮・薬師寺を中心として―」[4]の論考も公表している。また、細川氏被官の安富氏に関しては、廣木一人氏「讃州安富氏の文芸―『熊野法楽千句』のことなど―」[5]の論考も存するが、この論には、ここで対象とする宝密・宝城に触れる部分もあるが、中心とするのは、宝城らの文芸を受け継ぎ、領国讃岐と深く関わった安富盛長（「熊野千句」の作者）の文芸の跡付けである。

私が宝密・宝城の被官クラスの文芸活動に興味を喚起されたのは、昭和四十年代以降から近年に至るまで、次々と両人の参加した和歌会の新資料が発見・報告されたことに起因する。

管領であった細川氏、特に細川満元（道歓）という熱狂的な和歌愛好者に仕え、法楽歌会などの下準備などに奔走したであろう宝密らの活動の軌跡やその詠歌の文芸レベルなどを、為政者としての生身の人間とも絡めて彫琢するのが本論考の目標である。このことは、単に両人の問題に止まるものではなく、他の守護大名に奉仕した被官クラスの文芸活動の有様をも示唆するものと思量する。

一　守護代・代官

守護大名の被官には、領国内に在地する「国衆」と大名の側近にあって、守護代などとして分国に派遣された「内衆」と称せられる者があるが、安富氏は細川氏の「内衆」である。

その細川氏の内衆の成立、さらには内衆安富氏の動向に関しては、すでに史学者側の論考が存する[6]。

さて細川氏の内衆安富氏は、下総より起こり、応安年間に細川頼之に従って讃岐に入ったという所伝があるが（西讃府志・南海通記）、小川信氏は、下総の安富氏が直接頼之の被官となったのではなく、一旦幕府奉行人となった一族から頼之系細川氏の内衆安富氏が起こったと推測する[7]。

さて、当面対象とする宝密・宝城に関して、まずもって確認しておくことが二つある。一つは、歌会資料などで両人は行動を共にしており、兄弟とみなしてよいが、「顕伝明名録」では「宝密」を「周防守入道」で「宝城兄」と指示している。宝密が宝城の兄であることの根拠は確認できないが、後に紹介の亡父の追善和歌の勧進なども宝密が主導していることなどから判断して、この指示は信頼してよいのかもしれない。

二つめは宝密・宝城というのは俗名ではなく入道名だということである。そのことは、後述する「詠法華経和歌」（白峯寺蔵）の自筆懐紙に「沙弥宝密」「沙弥宝城」と署名しているので明確である。この「沙弥」は、一人前の僧になる前の少年僧ではなく、仏道を求めて剃髪したが、出家者としての戒行を行なわず、妻帯、職務に従事している入道のことかと推測される。

さて、明徳三年（一三九二）八月二十八日には相国寺供養が催行され、そこに将軍足利義満を始め、多数の公卿・諸大名が参列、そのなかに、管領細川頼元の随兵として列なった二十三騎のなかに「安富安芸又三郎盛衡」の名が見える（相国寺供養記[8]）。一方、相国寺供養のあった翌月の九月十二日に、細川頼元の内衆の安富安芸守が三谷次郎左衛門尉宛に「祇園雑掌申備後国小童保事云々」という奉書を送付、さらに翌十三日に、先の奉書の案文を添えて祇園社に提出した八坂神社文書が現存する。この文書類を収集した『八坂神社叢書 四』は、文書の署名で判読しがたいものは、慎重をきし、原署名のままに影印している。先の両文書の署名も影印だが、小川信氏は、九月十二日の方を「盛家カ」、翌十三日の方を「盛□（家カ）（花押）」と推測している。両署名は内容から判断して同一人だが、十三日の方は署名の「盛」の下の字が花押らしきものと重なり判読しがたいが、十二日の方は、小川氏の推測のように「盛家」と判読してもよさそうな署名である。そして、十三日の文書に「昨日愚息又三郎ニ蒙仰候、備後国小童保事云々」とあることと端裏書の「管領御内安富安芸守」を勘案して小川氏は、安富安芸守（盛家カ）は管領頼元の近臣で、先の相国寺供養に列した「又三郎盛衡」は、その子息であると考証している[9]。この判断は正鵠を射ていると思うが、ここで対象にしている宝密・宝城と絡めると、さらに看過できない事実が浮上する。実は後述するように両人の父が安富盛家であることが判明するので、相国寺供養に参列した「安富安芸又三郎盛衡」（盛家の子息）こそ宝城の俗名であり、その若き日の事跡を示すという可能性がある。宝城は後年の古文書などでも「安富安芸入道」と称されているのも、その傍証となろう。

次に宝城の職掌を示唆する重要な文書に「三宝院文書」[10]（醍醐寺文書）がある。

同文書には、応永十六年（一四〇九）九月十七日に、細川氏奉行人が「安富安芸入道」（宝城）に宛て、「三宝院御門跡領讃岐国長尾庄」に関する文書を発注しているが、その遵行を宝城は、翌日の九月十八日付で「安富次郎左衛門入道」に施行状として下している。

この二つの文書から、宝城が守護代であり、「安富次郎左衛門入道」は又守護代と推測されること、奉書と施行状の日付が一日差であることは、奉行人が在京している守護のもとにいることから、宝城も在京していたものと考えられるとの見解も提出されている[11]。

さて、備中国新見庄は、十三世紀初頭から十六世紀後半に至るまで、最勝光院領、その後は東寺の寺領であったこともあり、「東寺百合文書」などに関連資料が多数存する。そのなかに新見庄の代官職を請負っている宝城関連の文書も散在する。この宝城・智安など安富氏の新見庄代官請に関しては、杉山博氏の『庄園解体過程の研究』に詳しく、他にもそれに言及する史学者の論考があるので、諸先学の見解を、逐一古文書にも当って再確認し、私見も交えて略記

しておく。

新見庄では、応永九年（一四〇二）、地頭方代官与阿弥と新見清直の二者と領家方代官職を争った「安富因幡入道」の存在が確認でき、杉山・横尾両氏は、この人物を安富宝城とする（最勝光院方評定引付・同年七月五日）。しかし、文書によると、「水速入道（又号安富因幡入道）」とあり、宝城と同一人物か否か疑問である。宝城は「安芸入道」と称しているからである。この時に代官になったのは、新見庄の使者として上洛してきた塀和為清である（東寺百合文書、江・さ・ゆ）。しかし為清は年貢未進を続けたため、東寺側が応永十四年（一四〇七）、この件を幕府に訴える（最勝光院方評定引付・同年十二月二十四日）。この状況を受け、応永十五年八月十日、宝城が代官に任命される。この事実は「東寺百合文書」（あ38-56）に「安富宝城新見庄領家方所務職請文案」が現存するので確認できる。その他、「東寺百合文書」（あ4-24・京16-24）には、応永二十七年四月十六日付の「安富宝城重請文」などもあり、宝城の代官としての活動の一端が窺見できる。

その間の宝城の年貢寺納は安定しており、東寺側としては満足のゆくものだったが、守護方による毎年定量の年貢献納は、農民にとって辛苦であった。やがて応永三十四年（一四二七）四月、新見庄の農民が上洛し、宝城の非行に対する訴えを東寺に提出するという事態が惹起する（最勝光院方評定引付・同年四月二十四日）。これによると宝城は代官として農民に非分の課役をかけ収奪していた様子が窺える。

これと関連することは、三宝院門跡でもあった満済の「満済准后日記」にも窺見できる。即ち、同日記の応永三十三年十月十六日の条には、今日、細川道歓が四十九歳で死去したことを「不便不便」と哀悼した記事がある。それから一週間後の十月二十三日の条に「宝清法印」が来訪、「東寺寺領備中新見事、此間ハ細河京兆内者安富入道請地也、彼入道今度京兆抜薬入之條違上意云々、仍已ニ高野へ罷登了」と告げている。この細川道歓の病気の際に投薬をめぐってトラブルを生じたという「安富入道」は宝城とみなしてよい。さらに宝清法印は代官職の代替を満済に持ちかけているが、彼は「暫可相待由仰含了」とし、その後も東寺側は代官交代を要望しているが、満済はそのままでよい旨を申し渡している（最勝光院方評定引付・応永三十三年十二月二十四日）。

新見庄の農民が上洛して訴状を東寺に提出したのは、その翌年の応永三十四年四月のことである。この事態を考慮してであろう、宝城は正長元年（一四二八）十二月二十四日頃、東寺に「新見庄代官職補任」を所望している（最勝光院方評定引付）。これを最後として宝城の事跡は辿れなくなり、やがて安富智安が新見庄領家方代官職に就いている。

なお宝城が新見庄の代官の頃の事跡には、応永二十年八月九日付

の、細川道歓が守護代宝城をして、讃岐国本山郷内得永名を細川持有代に返付させた記録もある（永源師檀紀年録[12]）。また、普文頭陀が勧進となった応永二十二年六月十五日奉納の「竹生嶋縁起[13]」の巻末の「助縁衆」の一人に加わる「宝城」なる人物も、年代からみて同一人物であろう。

如上は、宝城の守護代・代官などの活動の一端だったが、その兄にあたるという宝密の方には、その種の職掌を示す記録・文書が見出されていない。彼は「安富周防守入道」と呼称されているので、それ相当の職務を勤めたと思われるが、関連する記録・文書がみえないのは、単なる偶然のことなのであろうか。けれども宝密は後述するように、むしろ守護代といった職掌よりも、和歌などの文芸活動に生活の比重をかけていたように臆測される。

二　詠歌活動

次に宝密・宝城関連の和歌資料を紹介する。

両人は勅撰歌人ではあったが、昭和四十年以前にあっては、「新続古今集」入集の各一首と「頓証寺法楽百首」（続類従巻三八四）の各二首、合計六首の和歌が知られる程度の群小歌人にすぎなかった。

従って昭和三十七年刊行の『和歌文学大辞典』（明治書院）には、歌人としての項目登載はなかったが、昭和六十一年刊行の『和歌大辞典』（明治書院）では、両人は歌人として項目立てされ、八～九行ほどの解説が加えられている。

この変化の背景には、昭和四十年代以降になって、宝密・宝城関連の和歌の新資料が漸次発見・報告されたことがある。そこで、ここでは各資料発見の年代順に、その経緯と内容を説明してゆきたい。

正徹の家集「草根集[14]」（巻一）には、「頓証寺法楽詠六十首和歌」が収載され、その奥書に「応永廿一年卯月十七日、於細川右京大夫入道道歓家、讃岐国頓証寺法楽一日千首之内詠之」とみえる。この事実から、かつて細川満元（道歓）家で、頓証寺法楽の一日千首が催行されていたことは夙くから知られていたが、その実態は正徹以外不明であった。

ところで筆者は、昭和四十一年、金刀比羅宮社務所で「松山短冊帖」と称される豪華な折本短冊帖を披見した。内容は種々の歌人の自筆短冊が五十七枚貼付され、桐箱の蓋裏には、天保五年（一八三四）二月の筧政典の識語、短冊帖の最後の一面に、正三位治部卿藤原貞直の序文も貼付されていた。その識語や序文によると、元来千枚あった短冊は、漸次散佚して四十四枚になっていたが、享保の頃に某人が所々より十三枚を探し集めて五十七枚としたこと、その散佚を恐れ、天保五年に筧政典が現在の短冊帖を作成して、その短冊を貼付したということであった。

このなかには、正徹自筆の短冊四枚が存し、それが「草根集」の「頓証寺法楽六十首」のものと一致、この「松山短冊帖」が「頓証寺法楽一日千首歌」の奉納自筆短冊の一部であることが判明した[15]（ただし、五枚は別種の短冊と判断し、実質は五十二枚とした）。この短冊のなかに、宝密の「歳暮」「釈教」歌題歌と宝城の「五月雨」「岡葛」歌題歌、合わせて四首の署名入りの自筆短冊を見出すことができた。

この「松山短冊帖」は、元来は讃岐国白峯寺に襲蔵されていたことを知り、同年に白峯寺を訪問、宝物館で種々の資料を調査したところ、その中に宝密・宝城に関連する新出の和歌資料を二つ発掘できた。

一つは「頓証寺法楽当座三十首」である。

先述の細川道歓邸での「頓証寺法楽一日千首」や「頓証寺法楽百首」（続類従巻三八四）は応永二十一年（一四一四）に催行されているが、それは当年が崇徳院の二百五十年遠忌に当るので（正確には前年）、それを念頭にしての法楽歌会であったと思量される。

白峯寺には「後小松院勅額添翰」と題簽を付す巻物一軸が襲蔵され、そこに飛鳥井宋雅から富小路宛の書状及び宝密から院主御房宛の書状二通が収められている[16]。前者の宋雅書状に依ると、「頓証寺法楽百首」とともに「頓証寺当座三十首」も興行され、自分（宋雅）が、この和歌資料を清書して頓証寺に奉納した旨を伝えている。そして白峯寺には、この書状の指示した宋雅自筆の「頓証寺法楽百首」と「頓証寺法楽当座三十首」が現存しており、後者は従前に知られていない新出資料であった[17]。そしてこの資料にも宝密の「遠帆連波」歌題歌と宝城の「織女契久」歌題歌各一首が収められていた。

二つめは「詠法華経和歌」巻物一軸である[18]。

内容は、法華経各品和歌の各歌人二首の自筆和歌懐紙を継ぎ合わせて一軸に仕立てたものである。参加歌人をみると「松山短冊」や「頓証寺法楽百首」などの作者と二十名が一致する。詠作年次は作者の官位記載から判断して応永二十二年となり、和歌の「懐旧」歌題で「長月」を詠み込む歌があるので、一応、応永二十二年九月頃と推測される。

興行年次や作者層から判断し、崇徳院の二百五十年遠忌に関連するものかと予測されるが、この資料は宝密・宝城の父の追善供養歌とみなしてよい。その根拠は、法華経追善和歌での勧進者は「厳王品」を担当して詠出するのが慣例だが、ここでは「沙弥宝密」が担当、しかも、その詠歌も、

たらちねをみちびく法の道ならばこれもかはらじ大和ことの葉

と父親の追善を暗示しているからである。

この「詠法華経和歌」で、宝密は「厳王品和歌」と「懐旧」の二首、宝城は「嘱累品和歌」と「懐旧」の二首、合わせて四首の詠歌

が見出される。

さらに平成六年に、井上宗雄氏によって「応永二十二年七夕七十首」（小林強氏所蔵・寛政九年書写奥書を有する袋綴一冊）という新資料が報告された[19]。詳しくは井上論文に譲るが、この資料は作者層やその他の状況を勘案し、応永二十二年に細川道歓主催の七夕歌会との推測だが妥当な見解である。ただ原本の署名などが難読だったのか「本ノママ」とする歌人もある。その中に「宝窓（本ノママ）」とか「実城」などとする歌人がいるが、井上氏の推定のように、前者は「宝密」、後者は「宝城」とみなしてよい。

この新出資料の「七夕七十首」のなかに、宝密の「七夕煙」「七夕鴈」「七夕弓」歌題歌三首と宝城の「七夕山」「七夕虫」歌題歌二首、合わせて五首が詠出されている。

一方、元来千枚あった「松山短冊」の多くが散佚したことは、すでに言及したが、その散佚短冊のうち灰燼に帰したり処分されたものもあろうが、貴重な短冊だけに、所々に分散され、現在でも秘蔵されていることは充分に予測されることであった。

このことを念頭に「松山千首短冊」の料紙、法量、留穴跡、歌題、歌題の書風、構成員などの特徴に着目、個人蔵・『思文閣古書目録』・伏見宮家旧蔵『短冊手鑑』などから、「松山短冊」と確定しうるものを丹念に調査、蒐集し、その成果を平成十九年に公表されたのは別府節子氏である[20]。詳細は氏の報告に譲るが、そこに新しく五十四枚の短冊が発掘、蒐集されている（すべて影印があり有益）。

この新しく蒐集されたなかにも、宝密の「寄燈恋」「門柳」「駒迎」歌題歌三首と宝城の「紅葉随風」「寄筵恋」歌題歌二首、合わせて五首が見出される。

如上、昭和四十年代以降に公表された宝密・宝城関連の新出和歌資料を報告してきたが、それらに顕著な特徴のあることが確認できる。

即ち、新出資料の成立年次が応永二十一～二年に集中すること、しかも参加歌人は細川道歓とその被官を中心とし、それに宋雅などの飛鳥井家歌人、正徹・堯孝・梵燈などの当代の著名な歌僧で構成されていることである。

また各資料の背後に細川道歓（満元）の興行意志が窺えるし、年次が応永二十一～二年に集中するのも、彼の領国讃岐で薨去した崇徳院の二百五十年遠忌と頓証寺法楽の意図があった可能性がある。

因みに管領細川道歓は、「醍醐枝葉抄」（続類従巻九二四）の「枝葉鈔抜萃 応永廿四六月比」のところで「屋形ノ門」に「政道ノ方ニハ更ニ無数奇ニテウタテヤ歌ヲナニ好ムラン」など数首の落書を押されたこと、これに対し「京童部ノシワザ歟、此管領和歌ノ数奇異他也、毎日被管（ママ）ノ者続歌等令読之、飛鳥井中将入道（宗雅（ママ）父子、両三人）彼家歌会之為宗匠云々」と落首の背景をも注記する。この道歓の異常なま

での和歌への数奇ぶりや歌会の歌人層の様子は、先述してきた和歌資料の実態を如実に反映している。

以上の新出資料の出現で、従前に六首しか知られなかった宝密・宝城の和歌は、総計二十六首を蒐集できるまでになった。

ただその和歌は歌会などの題詠歌ばかりで、実情歌が一首もないのは淋しい気がする。しかし、堯孝の応永二十八年の年次私家集「慕風愚吟集」（書陵部蔵・孤本）に、三月二日の積雪をめぐって、次のような宝密と堯孝の贈答歌が書き留められている。

同日（三月二日）宝蜜（マヽ安富）周防守入道もとより申したび侍りし

みやこだに草木もわかず山ざとや又冬ごもるけさのしら雪

東山の竹園にまゐり侍りしに、留守にて又の日申しつかはし侍りし

おもひやれ花の宮このみゆきにもみ山は春のすゑとしもなし

季節はずれの積雪に、洛中にいる宝密が山里に住む堯孝を思い遣った贈答歌として貴重である。

この一首も合わせ、宝密・宝城の和歌二十七首は、原本に依拠して忠実に翻字して、末尾に蒐集一覧しているので参照願いたい。

なお細川道歓は応永三十三年（一四二六）十月十六日に死去（四十九歳）しているが、その後の宝密・宝城の和歌は見出していない。ただ足利義教が永享五年（一四三三）二月十一日に張行した「北野社法楽一日万句」（書陵部蔵）の、管領細川（持之）の一座（大乗院の「律戸経蔵」）で、「よろつ春此道ひろきこの野哉」（持賢）の発句に対し「沙弥宝密」が「御注連の雪ま青き新草」の脇句を付した連歌資料がある。道歓逝去の後も、さらに持之の被官として連歌活動を行なっている、永享五年生存を知らしめる宝密の事跡として追補しておく。

三　書写活動

先に白峯寺蔵「後小松院勅額添翰」一軸に収められていた二通のうち、宋雅書状の方は少し言及したが、もう一通の宝密が「院主御房」に宛てた「（応永二十一年）極月十三日」の日付のある書状は長いので、その大意を人物も特定して次にまとめておく。

「頓証寺」額の揮毫を「屋形」（道歓）を通じて「御所様」（足利義持）に願い出たが、義持は「神慮難計之由」として「仙洞」（後小松院）へ執筆を願い出た。さらに末代のことも考慮し、道歓から飛鳥井宋雅を介して「御製」を勅書で賜わった。また宋雅自筆の「頓証寺法楽百首」「同当座三十首」、それに「法楽一日千首」も合わせて箱に入れ、使者（筑後殿）に託したので、御廟へ納めてほしい。

この書状から、細川氏被官として、御廟に収める勅額や御製、法楽和歌資料など、万般に渡って細心の手配を怠らない宝密の行動の一端が如実に窺える。

ところで、後小松院宸筆勅額の「頓證寺」は、現在、白峯寺の宝物館に秘蔵されているが、同時に賜わった勅筆の「御製」は行方不明である。が、勅筆「御製」ではないが、その和歌が意外なところから見出されたのである。

国立国会図書館に、極札に「宝密法師」筆とする「長秋詠藻」が所蔵される。筆者もこの写本に直接当って調査したことがあるが、ここでは松野陽一著『藤原俊成の研究』の紹介・解説に依拠しておく。

該本は室町末から江戸初期頃の書写で「于時応永卅年六月下旬比以仁和寺常光院之本書之」と奥書があり、続いて改丁して、次のような一種の奥書が記されている。

讃州白峯頓証寺額　仙洞宸筆、同
御製あり載上　応永廿一年七月日
千世かけてうき
なはとまれ筆の
跡の
たちともしらぬ
松のうら
浪
此額頓証寺へ宝密まいり侍し事、家僧
可然由しるし留、屋形へ此分申処、御所様へ
申されしを、同御所、又仙洞へ御申ありてあそ
はす、同百首法楽奉納在之、然者、彼御
製・法楽百首次於私宿所被講了、あり
かたき也、

松野氏は、該本を宝密筆とするのは時代的に無理だが、宝密と無縁ではないとする。そのことは先に紹介した宝密の書状内容とも重なることによっても明瞭で、この「千世かけてうきなはとまれ筆の跡の…」の和歌こそ、後小松院が自身の扁額の筆跡に謙辞を込めて詠じた「御製」であったとみなしてよい。

なお松野氏は、「長秋詠藻」には、讃岐の配所の崇徳院が俊成に遣した長歌とそれへの俊成の返歌があり、崇徳院遠忌の頓証寺法楽和歌などを勧進する宝密が、この家集に格別の関心を寄せるのも当然であり、該本は宝密の手を通った本の転写本であることは間違いないとの見解を述べている。

因みに該本は、先掲奥書のように応永三十年六月下旬頃に「仁和寺常光院之本」をもって書写したとするが、これは常光院堯孝の所持本であろう[21]。

堯孝は従前に紹介の宝密関連の歌会資料にほとんど出詠している。また家集「慕風愚吟集」には先掲のように宝密との贈答歌がある。この他にも、この家集には宝城・宝密の詠歌活動が記録されているので、その状況を摘記しておく。

応永二十八年正月十六日の条には、細川道歓家の月次会始に宝城・宝密ら二十四名の参加者の明記がある。堯孝はこのほか、宝密勧進の「住吉法楽百首」「北野法楽百首」にも出詠。さらに「宝密（安富周防入道）もとにて十五首歌よみ侍りしに」と自邸で開催した歌会記事を含め、宝密は七度ほど登場する。が宝城の方は一度だけの登場であり、宝密の和歌活動の顕著さが際立つ。これは守護代・代官の所で記述した両人の活動とは逆であり、宝城の方は代官職などに生活の力点があったことを暗示している。

ところで昭和五十一年に、小西甚一編著『新校六百番歌合』という労作が刊行されている。その解説で小西氏は、本文の「校訂に使用したテクスト」の一つとして、東京教育大学蔵（筑波大学附属図書館現蔵）の現存最古の写本の応永本―上冊（初恋～旅恋）、下冊（寄月恋～寄商人恋）の奥書を紹介、上冊の書写者は盛家、奥書は永正九年に盛家の後裔が識語を加えたもの、下冊の本文は奥書のごとく「宝善が応永二十四年に補写した」ものと推定された。

その下冊奥書を次のように翻字している。

此本於讃州宇多津亡父
盛家書写所也而寄
恋部一帖或人借不返
間三条京極草庵
書続了

応永廿四年正月日
桑門宝善〈花押〉

私はかねてから、この「宝善」は「宝密」の誤刻ではないかと疑念を抱いていた。応永頃に「宝善」という人物はみかけないし、「宝密」の自筆短冊に依ると、署名の「密」という字体は、一見して「密」とは判読しがたい癖のある署名であるからである。

近年、筑波大学図書館が、所蔵の古写本類をウエッブサイトで画像公開していることを知り、この写本の本文・奥書を確認すると「宝善〈花押〉」ではなく、自筆短冊の「宝密」と同一署名と判読できた（「花押」はない）。

下冊の本文と奥書が宝密の筆跡であることの確認は、細川氏被官の安富氏に種々の新知見を加えることになった。

従前には曖昧だった宝密・宝城の父は盛家であったことが確定し（『香川県史』なども「宝城」と「盛家」を同一人と誤認）、かつて讃州宇多津に在ったこと、盛家は明徳三年（一三九二）九月の「八坂神社文書」にも署名がみえ、宝密が勧進した応永二十二年（一四一五）の亡父の追善和歌（詠法華経和歌）も盛家の供養と判明する。また、自身で「六百番歌合」などを書写するような和歌の方面にも嗜好のある人物であり、この血脈が宝密・宝城にも受け継がれたのであろう。奥書によると宝密は、或人が借出したまま返却しなかった亡父筆の恋部一帖を補写しているが、それを行なった場所を

京洛の「三条京極草庵」だとし、自身を仏道修行に励む「桑門」と称している。そこには弟宝城とは相違し、守護代・代官といった職掌から身を引き、「和歌ノ数奇異他」とされた細川道歓のもとで、歌会活動や歌書の書写を通して、被官として奉仕する姿が彷彿としてくる。

しかも先の「長秋詠藻」といい、俊成判の「六百番歌合」といい、いずれも、俊成に関連する歌書を書写しているのは、偶然のことではなかろう。

一方、古筆切の中にも宝密を伝称筆者とするものも散在する。その一つは清輔の歌学書「奥義抄」で、徳川黎明会叢書の古筆手鑑『藻叢』・『玉海』、細川家永青文庫叢刊『手鑑』、井上宗雄蔵『古筆手鑑』に、各一葉、四葉が見出され、その古筆内容も検討されている[22]。

また藤井隆蔵の「伝宝密法師筆大四半切」の八坂流本に最も近いという「平家物語」古筆切の紹介もある[23]。その解説で藤井氏は「有名でもないこのような人を伝称筆者に持ってきているのは不審で、何か理由があるのであろう」とするが、以上のような室町中期頃の宝密の書写活動を背景にすると、伝称筆者となる必然性も納得されてこよう。

四　詠歌手法

最後に、現在蒐集できた宝密・宝城の和歌二十七首を対象に、その詠歌手法といったものに言及しておきたい。

両人は、永享十一年（一四三八）六月に完成した最後の勅撰集「新続古今集」に各一首入集、晴れて勅撰歌人となっている。先に紹介した頓証寺法楽和歌関係には、細川氏被官と覚しい人物が十余名いるが、勅撰入集作者は他にいない。その点、わずか一首の入集ではあったが、今川了俊・梵燈なども一首、入集を期待した正徹・心敬にいたっては、その願望を果たせなかったことに鑑みれば、これは破格の扱いであり、栄誉であったろう。その背景には、「新続古今集」の撰者飛鳥井雅世、その父の宋雅及び和歌所開闔であった堯孝らとの交誼があったろう。

まず、両人の勅撰入集歌から吟味しておく（以下、漢字宛・濁点などを付し、校訂本文で引用）。

秋風の松吹く音もうらさびて神も心や住の江の月

（新続古今集[24]・雑上・一七一八）

「題しらず」の宝密の歌だが、「うらさびて」に「浦」、「住の江」に「澄み」を掛け、松風の音と月光を点描して、住吉明神の清澄な心を詠嘆する。

さざ浪やくにつみかみのうらさびてふるき都に月ひとりすむ

（千載集・雑上・法性寺入道前太政大臣・九八一）

嵐吹く松の梢に霧晴れて神も心や住の江の月

（住吉社歌合・嘉応二年・藤原定長・三四）

といった先蹤歌をみると、その種の修辞や発想に類似した歌であることが認識できる。

一方、宝城の勅撰入集歌は、次の恋歌。

人心こなたかなたによる糸のただひと筋にたのむはかなさ

（新続古今集・恋四・一三七六）

この歌も「よる」に「寄る」と「縒る」を掛け、「縒る」「ひと筋」が「糸」の縁語。

しかも、次の歌を本歌取している。

片糸をこなたかなたによりかけてあはずはなにを玉の緒にせむ

（古今集・恋一・読人しらず・四八三）

「こなたかなた」の歌句の置き所、本歌の恋歌を、他の部立に転じていないなど、やや変化に乏しい面もあるが、勅撰入集歌だけに、まずは無難な和歌といえよう。

宝密と宝城の和歌を比較すると、歌道に専心しただけあって、宝密の方が達者な詠みぶりが窺える。その宝密の歌風の一端を詠歌手法の面から検討してみたい。（以下、出典指示のない和歌は、すべて「松山千首短冊」）。

歳　暮

越えぬまもあはれなるかな年波の老に寄りくる末の松山

この歌は著名な、

君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山浪もこえなむ

（古今集・東歌・一〇九三）

という、変らぬ恋情を誓った歌を本歌とするが、それを前提に、浪が末の松山を越えなくとも哀れだ、それは歳暮となり「年波」（年並み）が寄せ来るからと変奏している。が、慈円に、

としなみはわが袖よりぞこえて行くのこるうき身の末の松山

（拾玉集・四二五四）

といった類想歌がある。

夏　月

いづるまも浪まに明けて網の浦やめにもたまらぬ短か夜の月

（頓証寺法楽百首）

「網の浦」は「万葉集」（巻一・四〇）の「あみの浦に船乗りすらむ」が初出とされるが、用例は多くない。この歌の眼目は、短い夏の夜の月を地名の「網の浦」と絡め、「めにもたまらぬ」と「目」と「網のめ」にかからぬと発想したところにある。「（網の）めにもたまらぬ」は勅撰集にはみえない措辞だが、「平家物語」[25]に

かへりこむことはかた田にひくあみのめにもたまらぬわがなみだかな

（巻十二・平大納言被流）

という、平時忠が流罪のときに詠じたという類想歌がある（この歌は、「月詣和歌集」巻九の恵円法師の歌とほぼ同じである）。宝密に「平家物語」の古筆切のあることも想起されて興味深い。

門　柳

（1）時をえてみゆる人目もしげ糸のたえずよりくる門の青柳

駒　迎

（2）会坂のほどは木陰やもりつらむ都にいづる望月の駒

寄燈恋

（3）ともし火のまたたくよりもわれぞはや待つ夜あけなば消えもはつべき

（1）は、屋敷の門前の青柳の枝が風に揺られて寄りくるさまと、時を得て人が頻繁に出入りする景観を重層。「しげ糸」（粗い絹糸）に「人目も繁」を掛け、「絶え」「縒り」を「糸」の縁語とする。（2）は、逢坂での駒迎えを詠ずるが「望月（信濃国の御牧の名）の駒」から月光の景観も重層させる。「木陰やもり」の「もり」は月光が「洩る」と駒を「守る」との掛詞。

東より今日逢坂の山越えて都にいづる望月の駒

（新勅撰集・秋上・後京極摂政前太政大臣・二六八）

のような類想歌がある。（3）の歌では、閨房の燈火の消えるのよりも、一夜待っても恋人に逢えない我が身の方が消え果てそうだと悲恋の思いを素直に詠出している。

一方、宝城の詠歌手法を数首の事例によって窺ってみたい。

五月雨

五月雨の空にまかせて此ごろはせきこそ入れね庭の遣り水

五月雨で庭が増水しているこの頃は、庭に遣り水を堰き入れる必要もない意で、それを「空にまかせて」としたのが、この歌の眼目。すでに、

雨ふれば小田のますらをいとまあれや苗代水を空にまかせて

（新古今集・春上・勝命法師・六七）

などの類想歌も見出される。

織女契久

天の戸の開（あ）けし代よりや七夕の空だのめなく契りをきけん

（頓証寺当座三十首）

彦星と織姫との永久の契りを、天の岩戸を開けた太古からのものかと詠嘆するが、天空に展開される恋なので、「空だのめなく」と転じているのが珍しい。

寄筵恋

（1）敷妙の枕の夢もなかりけり人を待つ夜の閨の狭筵

紅葉随風

（2）紅葉ばを心づからや散らさじとよきては吹かぬ嵐なるらん

（1）は、恋人を待っている夜の閨の狭筵では、夢も見ることもない恋情を吐露する。「枕の夢」の圧縮表現や「閨の狭筵」の措辞の早い用例は新古今歌人に見出せるものである。（2）の歌は「春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふと見む」（古今集・春下・藤原好風・八五）を本歌とするが、春の桜花を秋の「紅葉」に転じ、かつ、嵐が紅葉を避けて吹かないのは、「心づからや散らさじ」とするのかと本歌を奇抜に変奏している。

以上、数首をもって、両人の詠歌手法の一端を瞥見した。特別に斬新な和歌はないが、それ相当の本歌取や修辞技巧を駆使するなど、伝統的な手法を摂取している。

ただ歌題詠ばかりで実情歌がないのは物足らない。恐らく彼らにとって詠歌行為は、自己の心情を吐露することが最大の目的ではなく、専ら、和歌好みの守護大名のもとに被官として奉仕し、雅の文化としての和歌の享受に勤め、公家クラスに近い歌境を庶幾することに心を砕いたのではなかろうか。

おわりに

細川氏の被官であった宝密・宝城兄弟の文芸活動を新出和歌資料などを中心に、職掌とも絡めて素描してみた。

そこに二人の兄弟の生の有様の位相を垣間見できたのも興味深い。即ち、詠歌行為という接点はあるものの、やや隠逸的な姿勢で歌道に専心奉仕する兄の宝密と、代官職といった為政に力点をおく弟宝城の生き方の相違である。農民側からすると、宝城は悪代官であり、そこに風雅な和歌を詠ずる人物との違和感もあるが、それがまた生身の人間の偽らざる姿でもあろう。

この細川氏被官の両人の文芸活動が、他の地方の守護大名の被官クラスの活動の典型とみるのは、短絡にすぎよう。けれども、京洛の文化を積極的に摂取する守護大名に奉仕し、様々な文芸の興行などに奔走し、文化摂取の下支えの役目を果たしことでは同一であろう。

ここで辿った宝密・宝城の具体的な営為は、同時に室町時代の武家歌人層の文芸活動の一端を如実に反映するものと思量する。

［注］

（1）深津睦夫『中世勅撰和歌集史の構想』。

（2）米原正義『戦国武士と文芸の研究』・川添昭二『中世文芸の地方史』・井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期［改訂新版］』『中世歌壇史の研究 室町後期［改訂新版］』ほか。

（3）「国学院雑誌」（昭和五十四年三月）。

（4）「国史学」第百四号（昭和五十三年一月）。

（5）「文化財協会報」（香川県文化財保護協会）（平成十年度特別号）。

（6）小川　信「守護大名細川氏における内衆の成立」（国史学・第七十七号）、横尾国和「細川氏内衆安富氏の動向と性格」（国史学・第百十八号）ほか。

（7）注（6）の小川信論文。

（8）『群書類従』（巻四百三十四）所収。

（9）注（6）の小川信論文。

(10)『大日本史料 第七編之十二』に依拠。
(11)『香川県史2 通史編 中世』。
(12)『大日本史料 第七編之十八』に依拠。
(13)『群書類従』(巻二十五) 所収。
(14)『私家集大成 中世Ⅲ』所収本に依拠。
(15) 拙著『正徹の研究』(第三篇第二章第二節) で紹介。
(16) この二通の書状は、臼井信義が「頓證寺勅額副状」(古文書研究・第二号) に紹介、『大日本史料 第七編之二十』にも翻刻されている。
(17)(18) 拙著『正徹の研究』(第三篇第二章第一節・第三節) で紹介。なお、臼井信義「崇徳天皇二百五十年遠忌 頓証寺法楽和歌史料」(『日本史籍論集下巻』にも考察がある。因みに、これらの新資料は『大日本史料 第七編之二十』・『新編香川叢書 文芸篇』にも翻刻がある。
(19)「和歌史研究について―新資料若干の紹介を兼ねて―」(国学院雑誌・平成六年十一月)。
(20)「『頓証寺法楽一日千首短冊』について―既存資料、新出資料による考察と集成」(出光美術館研究紀要・十二号・平成十九年三月)。
(21) 松野氏は「常光院」を「堯尋」とするが、「堯孝」とみるべきだろう。
(22) 日比野浩信「『奥義抄』古筆切の検討―その本文と流布―」(和歌文学研究・第七十三号・平成八年十二月)。
(23) 藤井 隆・田中 登『国文学古筆切入門』。
(24) 以下に引用の和歌本文や歌番号は『新編国歌大観』に拠るが、表記を変えた所もある。
(25) 新日本古典文学大系『平家物語』に拠る。

―いなだ・としのり、岡山大学名誉教授―

宝密・宝城　和歌集成

一．現在知られる和歌を原本に即して忠実に翻刻。
一．各項で不記の箇所は「同前」を意味する。
一．「七夕七十首」は、原本では「宝窓」「実城」と誤写するが、ここでは正して引用。
一．各和歌資料の性格などは拙論を参照してほしい。

詞書・歌題・作者・和歌本文	出典作品名	原本所蔵
題しらす　宝密法師 烋風の松ふく音もうらさひて神も心や住の江の月 恋哥の中に　宝城法師 人心こなたかなたによるいとのたゝひとすちにたのむはかなさ 夏　月　宝密 いつるまも浪まにあけてあみのうらやめにもたまらぬみしか夜の月 初　恋　宝密 みそめしは君のむかしもかしは木もたよりやおなしおもひなりけむ 夏　草　宝城 松山のまつはときはの色なるをなつきにけりとしけるした草 旧　恋　宝城 わするなといひしむかしのなかりせはふりぬる中になにをかこたん 遠帆連波　宝密 さきたつはおひてやはやきしは舟のほかけはのこるおきつしら浪	新続古今集・雑上 新続古今集・恋四 頓証寺法楽百首	書陵部（兼右本） 白峯寺（宋雅筆）
	頓証寺法楽当座三十首	白峯寺（宋雅筆）

詞書・歌題・作者・和歌本文	出典作品名	原本所蔵
織女契久　宝城 あまのとのあけし代よりやたなはたの空たのめなくちきりをきけん		
詠法華経厳王品和謌　沙弥宝密 たらちねをみちひく法の道ならはこれもかはらし大和ことの葉	詠法華経和歌	白峯寺
懐　旧 めくり来ていとゝおもひは長月の袖の時雨ははるゝ間もなし		
詠法華経嘱累品和歌　沙弥宝城 つたへくる法にあはすはなき跡をなにゝつけてかけふはとはまし		
懐　旧 いにしへもおなしうきよをしのふかなおやのいさめをおもひてにして		
歳　暮　宝密 こえぬまもあはれなるかなとし波の老によりくる末のまつ山	松山千首短冊	金刀比羅宮
釈　教　宝密 まよふそとおもふ心にたちかへれ外にさとりのいかてあるへき		
五月雨　宝城 さみたれのそらにまかせて此ころはせきこそいれね庭のやり水		
岡　葛　宝城 もりすてし岡辺の小田のかりいほにひとりうらむるくすの下かせ		
寄燈恋　宝密 ともし火のまたゝくよりもわれそはや待夜あけなはきえもはつへき	松山千首短冊	個人蔵

詞書・歌題・作者・和歌本文	出典作品名	原本所蔵
門　柳　宝密	松山千首短冊	思文閣古書目録
時をえてみゆる人目もしけ糸のたえすよりくる門の青柳		
駒　迎　宝密		
会坂のほとは木陰やもりつらむみやこにいつるもち月の駒		
紅葉随風　宝城		
紅葉はを心つからやちらさしとよきてはふかぬ嵐なるらん		
寄筵恋　宝城		
しきたえの枕の夢もなかりけり人を待よのねやのさむしろ		
七夕煙　［宝密］	七夕七十首	小林強蔵
ほし合のそらたきもの、薄けふりくゆるや雲のころもなるらむ		
七夕鴈　［宝密］		
おなしくは梶の七葉のことの葉をけふよりかけよ鴈の玉つさ		
七夕弓　［宝密］		
ふけぬ間に入月弓のをしかへしなを末ちきれ星合のそら		
七夕山　［宝城］		
萩の尾のやる下みつに影みえてよろつ代たえぬ星合のそら		
七夕虫　［宝城］		
さ、かにのくもの衣にたなはたのさそかさぬらむすゑの契を		
同日宝蜜（ママ）安富周防守入道もとより申たひ侍し		
みやこたに草木もわかす山さとや又冬こもるけさのしら雪	慕風愚吟集	書陵部